

2026年  
3月9日 No.1829



# 週刊 教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryō.co.jp>



## 潮流

### 基礎学力と学習意識で国際調査

公益財団法人スプリックス教育財団 調査研究員 三村杏奈 秦 徳郎 (上)

資料

### 検討資料⑦ 高等学校の単位制の大幅な柔軟化について

——総則・評価特別部会

## CONTENTS

#### ▶ 2 潮流

##### 基礎学力と学習意識で国際調査

三村杏奈、秦 徳郎(公益財団法人スプリックス教育財団 調査研究員) (上)

#### ▶ 5 解説・ニュースの焦点

○「考え、議論する道徳」実装へ、  
チームで行う授業導入も  
○教職課程の在り方などで校種別に論点  
編集部

#### ▶ 8 特別企画

教育課程柔軟化サキドリ研究校とは？  
編集部

#### ▶ 10 島しょ部におけるカリキュラムづくりから考える

島しょ部における場に根差した教育  
大貫 守(愛知県立大学教育福祉学部教育発達学科 准教授)

#### ▶ 12 インクルーシブ教育時代の教員養成

医療的ケアの必要な子どもたち  
齋藤大地(宇都宮大学共同教育学部 准教授)

#### ▶ 14 校長講話

なぜ学ぶのか——学びが人を変えていく  
上田祥子(明蓬館高等学校・アットマーク国際高等学校理事長 特別顧問)

#### ▶ 16 安心・安全な学校運営のための危機管理

近年の多様化する子どもの諸課題とスクール  
カウンセリング活動  
新井 雅(跡見学園女子大学 教授)  
金子恵美子(慶應義塾大学 准教授)

#### ▶ 19 資料

検討資料⑦ 高等学校の単位制の大幅な  
柔軟化について  
総則・評価特別部会

#### ▶ 33 Voice

#### ▶ 35 教育問題法律相談

子どもの個人情報目的外利用  
三坂彰彦(弁護士)

#### ▶ 36 学校事務新時代

公立高等学校の学校事務の可能性を探る②  
高等学校の魅力化と事務職員  
吉村由巳(愛媛県立吉田高等学校 事務長)

#### ▶ 38 学級・授業づくり 虎の巻

MCから学ぶ  
教師の「コミュカ」向上大作戦(前編)  
俵原正仁(兵庫県・芦屋市立浜風小学校 前校長)

#### ▶ 40 管理職養成 教頭実務ガイダンス

学級編成を学校経営として考える  
野口みか子(全国公立学校教頭会顧問会 元会長代理)

#### ▶ 42 高校現場最前線

再編統合による普通科改革(上)  
渡辺淳一(北海道岩見沢東高等学校 校長)

#### ▶ 44 現場の課題に応える教育機関

これだけは知っておきたい  
海外ルーツの子ども・若者  
福岡里砂(特定非営利活動法人青少年自立援助センター  
YSCグローバル・スクール 広報担当) (上)

#### ▶ 46 データで見る教育

カリキュラム・マネジメントに関する意識について

#### ▶ 47 BOOK

『オモロー授業発表会』坊 佳紀、熊谷雅之  
『生徒の強みに気づき、「できる」を育てる心理学』  
伊藤 拓

#### ▶ 48 自著を語る

『多様性を受けとめる 清明高校の謎を解く！』  
横道 誠(京都府立大学文学部 准教授)

#### ▶ 51 品川裕香の共感教室

読み書き能力を上げてもち  
読解力が向上しない理由(後編)  
品川裕香(教育ジャーナリスト)

#### ▶ 52 マイオピニオン

小中学校におけるEmployabilityの育成  
小松郁夫(国立教育政策研究所 名誉所員)

# 潮流

公益財団法人スプリックス教育財団  
調査研究員

三村杏奈さん  
みむらあんな

同  
秦徳郎さん  
はた とくろう  
に聞く①



## 基礎学力と学習意識で 国際調査

「教育で人生を新しく。」を理念に  
奨学金支給と調査研究を進めてきた。  
このほど、生成AI時代の計算力など  
基礎学力の国際調査を実施した。

三村杏奈 兵庫県生まれ。大阪大学大学院理学研究科博士前期課程修了。2010年から教育系出版社でWeb編集者、2019年から新聞社の教材部門でWebディレクター。2024年から現職。

### 奨学金支給と調査研究を軸に

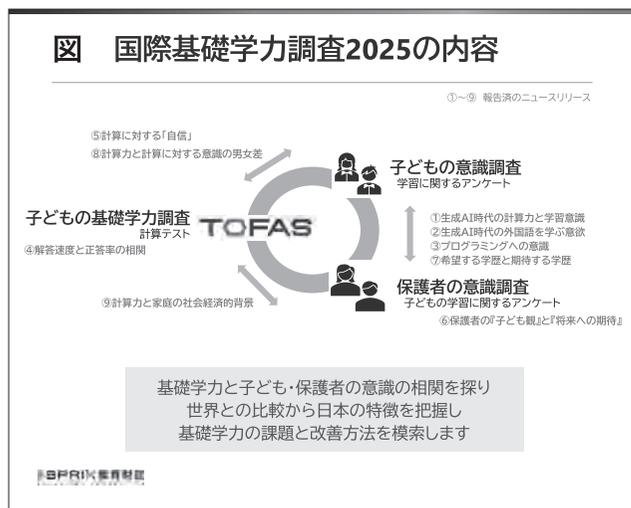
——公益財団法人スプリックス教育財団の理念と主な事業内容を教えてください。

三村 公益財団法人スプリックス教育財団は、金銭的な理由による学習機会の喪失を防ぐため、支援を必要とする若い世代への奨学金の支給を行っています。また調査研究事業として、教育の側面から金銭的な問題以外の諸問題に対する調査・研究を行い、これらの問題を社会全体で考える足掛かりを提供したいと考え、2023年に設立されました。これら二つの事業を軸として、若い世代の健やかな発展に寄与できることを願っています。

——奨学金事業の内容と、運営母体となっている株式会社スプリックスについて教えてください。

三村 奨学金事業は、児童養護施設に入所していた学生などを対象に、大学卒業までの最大4年間にわたって、年額36万円を支給しており、返済義務はありません。

関連企業である株式会社スプリックスは、「森塾」などの個別指導の学習塾運営、学習教材の開発・提供、プログラミング教室の運営、国際基礎学力検定事業（TOFAS）、教育ITを活用



した教育サービス（DOJO など）などを展開しています。会社名は「春」（Spring）から取ったもので、スプリックスグループの理念として「教育で人生を新しく。」を掲げています。教育によって、世界中の人に、人生の新しい季節「春」を提供したいと考えています。

—— 調査研究事業として、基礎学力に焦点を当てた調査を実施されています。

三村 この調査は、基礎学力に対する意識の現状を把握することを目的にしたもので、今

回、「基礎学力と学習の意識に関する保護者・子ども国際調査2025」を実施しました。2025年4月から8月にかけて、11カ国の小学4年生と中学2年生相当の子どもと、その保護者を対象にしています。調査内容は計算問題、保護者の意識調査、子どもの意識調査で、インターネットパネル調査（アメリカ、イギリス、フランス、南アフリカ、中国）と、学校調査（日本、エクアドル、ペルー、エジプト、インドネシア、ネパール）の2通りで実施しました。

この調査は、基礎学力と子ども・保護者の意識の相関を探り、世界との比較から日本の特徴を把握し、基礎学力の課題と改善方法を模索したものです。詳しい結果は、ホームページで公開していますので、ぜひ見ていただきたいと思います（図）。

## 基礎学力の現状と課題

——基礎学力に注目してきた理由は何でしょうか。

三村 森塾の個別指導の現場では、公立中学校の学力が中程度の生徒の場合、定期テスト対策以前に学習の根本的な課題が「基礎」にあることも多いです。定期テストの点数を上げるためという視点から基礎学力を考えた場合、算

数・数学では「計算」、国語では「漢字・語い」、英語では「英単語」などの定着状況を数字で把握すると、どの分野から見直すべきかの判断がしやすくなります。

そのため、国際基礎学力検定TOFASでは「計算」「漢字・語い」「英単語」の3つを基礎学力として定義しています。今回の国際調査では、特に「計算力」に注目しています。

生成AIの時代になっても、安易にAIに依存するのではなく、正しいかどうかを人間が判断することが必要です。そのためには、「読み書き計算」という基本がしっかりとれていることが求められます。

——今回の調査結果から日本の特徴や基礎学力の課題について、どう分析していますか。

三村 今回の調査では、生成AI時代の計算力と学習意識、プログラミングへの意識、計算に対する「自信」、計算力と家庭の社会経済的背景などを、計算テスト、学習に関するアンケートなどから分析しました。

全体的な総括としては、日本の子ども・保護者の特徴として、①基礎学力の重要性は十分に認識しており、「計算力」「語学力」は重視しているが、プログラミングはさほどではない②高い計算力の割に計算への自信がない③社会での

活躍より穏やかな家庭を期待する保護者は、子どもに高い学歴を期待しない——などの傾向が見られました。

また、基礎学力という視点から課題となっているのは、①低い自信②保護者の意欲の低さ③プログラミングやICTの利用に消極的——などが挙げられます。

## 国際比較から見えてくる課題

——調査結果の分析をされた秦さんは、課題となる点をどう見えていますか。

秦 PISA調査や、我々が今回の国際調査で実施した計算テスト、どちらであっても、日本の子どもたちのスコアは相対的に高いです。しかし、自分の能力に対して「自信がない」という意識が、日本の子どもたちには非常に強く見られます。

よく言えば、「日本の子どもは謙虚」とも言え、こうした傾向は、日本だけでなく、中国や韓国といった東アジアでは共通している面があります。逆に、点数が低い国であっても、「自信がある」と回答している割合が高い国もあります。ですから、「自信がない」という現状を一概に否定的に見るべきではないのですが、「自信」が過ぎ過ぎると、今度は、「数学が苦手なので、

文系の大学に進みたい」などと、文理選択にまで影響を与える現状は、やはり「課題」と言えます。

また、「保護者の意識」というのも重要な観点であることが分かりました。例えば、日本の保護者は、自分の子どもに「大学院にまで行ってほしい」と考える率は他の国に比べて低く、高学歴への期待はあまり持っていないと言えます。こうした保護者の意識が子どもの進学への願望に影響しているケースも少なくないはずですので、今後の教育調査では、子ども本人へのアプローチだけでなく、それを取り巻く保護者の価値観についても注視していきたいと考えています。

——ICTの利用についてはどうお考えですか。

秦 日本の教育におけるICTの利用は、諸外国に比べて遅れているという現状があります。ただ、それが一概に悪いことかと言えば、実は状況によって異なると考えています。というのも、ICTには活用に向いているものと、そうでないものがあるからです。

例えば、反復練習はICTの活用が効果的な分野です。日本のアプリで言えば、英単語を学ぶ「mikan」があります。「mikan」は、キャ

クターが色々な方法で褒めてくれるため、学習者の自己効力感を高めてくれます。導入している学校も増えているようです。

海外でいえば、イギリスの「Times Tables Rock Stars」という、算数の「九九」の練習をゲーム感覚でできるアプリがあります。このアプリは、小学校で広く活用されています。「mikan」と「Times Tables Rock Stars」どちらも、利用する子どもたちの学習意欲を高めて、反復練習しやすくしています。

このように、ICTは反復練習には適していますが、子どもたちが、新しい解き方や考え方を身につけるプロセスにおいては、ICTの力だけでは足りない部分があります。理解の段階では、先生がきちんと指導し、ICTはあくまで補助として使うのが効果的です。特に、学習の理解度が異なる子どもへの個別のケアは、人間である教師がきめ細かく行う必要があります。ICTのメリット・デメリットを理解して、二項対立にせずに、場面に応じて使い分けすることが必要です。

公益財団法人スプリックス教育財団 || <https://sprix-foun.dation.org/>

